

反障害通信

19. 9. 18

83号

ナショナリズム(民族主義、国家主義)に対峙し超えるために

韓国への安倍政権の意味不明の攻撃が続いています。それに合わせて日本のマスコミがナショナリズムにとらわれた報道を繰り返しています。

そもそもは徴用工問題での韓国の最高裁にあたる大法院の判決でした。それを日本政権がおかしいと言い出したのです。日本では三権分立が機能していません。その発想で、韓国の裁判所の判決はおかしいという内政干渉そのものの批判をしました。日本政府の見解も、個人の請求権は消えていないという見解ですから、もっと冷静に、韓国の行政府の対応を見極めたいという対応が外交交渉の常道だったはずです。その上に、丁度参議院選に合わせて、保守層の投票行動を掘り起こすためにナショナリズムをあおるという目的があったのだとわたしは押さえています。今度は貿易におけるホワイト国指定の取り消しという意味不明のことをやりました。経済産業省の世耕大臣や菅官房長官、そして安倍首相も報復ということをお口にすることを口にするか、匂わせていました。それでは、外交上通らないとあわてて、安全保障上の処置で報復処置ではないと、アベ政治の嘘とごまかしの政治を持ち出しました。すでに発したことばは消えません。「覆水盆に返らず」です。更に首相自身が、いまだもって、「徴用工問題が信頼関係の要」という内容の発言を繰り返しています。自分の国の「国民」はマスコミの協力で世論操作がそれなりにできるかもしれませんが、韓国ではこれはまぎれもなく報復処置そのものだととらえています。これまでの政治があります。「従軍慰安婦」や戦争と植民地支配の問題で、閣僚からこれまでの反省を反故にするような発言が出て閣僚を辞任することを繰り返していました。戦争と植民地支配の中で傷をおったひとに、傷に塩を塗るような発言を繰り返していました。反日感情に火に油を注ぐことを繰り返しやってきたのです。「日韓条約の請求権協定で解決済み」ということを常套句として使っていますが、そもそも植民地支配の反省と謝罪ということをしちんとささない協定だったわけで、だからこそ政権与党の中から反省のかけらもないひどい発言が繰り返してきたのです。日韓条約で反省と謝罪がすまなかったからこそ、繰り返し繰り返し〇〇談話とか出してきたし、また反省と謝罪をリセットする発言を繰り返してきたのです。

それに、そもそも第二次安倍政権が発足したときに、悲願の靖国参拝をして、長く韓国、中国との首脳会談ができなかったことをすっかり忘れたようです。当時の朴政権はそもそも保守政権そのものだったのです。そして、「日韓条約の請求権協定で解決済み」と繰り返していたのに、追加処置をしたのをこれも忘れたようです。「日韓条約の請求権協定で解決済み」と一貫して言ってきたというのは、そもそも村山首相のときに、「従軍慰安婦賠償」の民間基金をつくったことからしてもうそです。

発足してすぐ行った靖国参拝のつけを払う中で、閣僚の参拝は見合わせるとしたようで

すが、「与党議員も参拝は可」としているようで、首相も自分の身近な議員に託して、戦争と植民地支配の象徴である靖国と関わりを続けています。与党議員が(一部野党議員と一緒に)集団参拝もしています。外交交渉での政府間で過去にどこまで許されるのかの合意を作ったというごまかしですが、民衆レベルの世論では、そんなごまかしはききません。そもそも戦争と植民地支配の反省があれば、靖国神社は解体することだったことです。わたしは反省と謝罪のリセット発言をする、靖国参拝をする議員は、与党から除名することだと思います。ですが、そもそも安倍首相も麻生副総理も除名されるような発言を繰り返してきたのです。

安倍首相の悲願は憲法改定のようなのですが、これは、戦争の反省の中で作られた憲法で特に憲法9条は謝罪と反省の象徴だとも言い得ます。それを「結党以来の悲願」(?)として改定しようというのですから、これ自体が、「謝罪と反省」のリセットだと第三者的にはとらえられるのです。安倍政権は「謝罪と反省」を終わりにするために、「未来志向」ということばですり替えようとしているのですが、これはそもそも、「謝罪と反省」とそのリセットの繰り返しの中で、きちんと「植民地支配の謝罪」という文言を入れ、謝罪を完了させるということで、金大中大統領と小渕首相との間にかわされた1998年の日韓共同声明として、その際、金大中大統領側から出された「未来志向」ということばで、それを何を勘違いしたのか反省する側の日本の首相が、持ち出すのです。そして、そもそもその首相自身が、そしてそのスタッフたちがちゃんと反省も謝罪もしていないのです。

韓国との関係でテレビにコメンテーターとして出ている自民党議員が、「韓国は日韓併合で恩恵を受けた」とかいう発言を繰り返しています。更になぜか現役の外務副大臣がコメンテーターとして出て、「帝国大学はかなり早い段階でソウル大学を作った。」とかいう話をしてしています。このひとたちは、日本の侵略の歴史をしらないようです。日本は「帝国主義間競争」でのブロック経済化という中で、アジアから欧米の「帝国主義国」を排するとして、「五族協和」とか「大東亜共栄圏」というスローガンをかかげて侵略をしていった、だからこそ、「協和」というスローガンをかかげたのです。その内実は何か、差別の一形態としての融和主義的なこともやったという話です。その国の言語を奪うということや日本名を押しつける創氏改名までした、土地を奪ったということをして、植民地支配でなかったとどうして言えるのかという話です。それが、分からないから、自民党の国会議員から、アメリカの州にしてもらえばいいとかいう話が出てくるのです。もし、その論理がまかり通るのなら、なぜ、日本はサンフランシスコ条約を結び、一応アメリカの支配から脱したのでしょうか？ 占領してもらっている間に国語を日本語をやめて英語にしなかったのでしょうか？ (一応というのは、日米安保条約の地位協定下で制空権さえ、アメリカがもっている現実や従属外交で独立国と言えるのかという話があります。もっともこれは右翼のナショナリズムの核心的なことのはずですが、右翼自体もアベ政治の極右性の中で沈黙しています。)

さて、日本のマスコミは、その会社首脳が首相と定期的にお食事会をし、官邸サイドからの繰り返しの圧力の中で、すっかり与党政治の意向にあわせた、官僚と同じような付度政治を、今回の「日韓摩擦」でも繰り返してあげています。韓国の反日感情を報道するのに、教科書の「反日教育」とか持ち出すのですが、その報道をするのなら、日本の教科書検定や、

日の丸・君が代教育問題や、教育関連法案に「愛国心」を入れたというナショナリズム批判をすることです。日韓だけのことではありません。トランプのひどい政治をどうもおもしろがって報道しているのですが、日本の安倍政治もひどい、世界から極右としてとらえられ、笑いものになっているのに、自分の国の政治の批判をさておいて、他国の批判をやっているのです。戦前戦中の新聞が大本営発表の広報紙になってしまった、戦争と侵略の反省のない様子がここにもあるのです。

いつも選挙の時に、金正恩のミサイル試射とかあり、それをテコにして危機感をあおるという手法で得票率をあげることをやっていました。ところが、トランプのアメリカファーストでの短距離ミサイルの容認ということで使えなくなりました。それに代わるナショナリズムを煽るということで、今回の意味不明の行動に出たのです。意味不明というのは、グローバルゼーションの時代に貿易処置ということが、自国にもはねかえってくることを理解できていないという意味です。トランプはアメリカファーストで、しかも金のことしか、しかも短期的な局地的なことしか考えていず、自分の「岩盤支持層」を固め選挙に勝つことしか考えていず、そんなところで貿易戦争を始めています。その手法をまねたのでしょうが、自民党の支持層は財界ブルジョアジー一般なのです。財界の支持を得るために、株価の操作をし、法人税減税、累進課税の軽減をし、企業の内部留保蓄積に協力してきたのに、まして、米中貿易戦争の中で経済が不安定化し、消費税を10月にあげると表明していて、経済の不安定化要因をいかに軽減していくかというときに、韓国とのまさつを拡大する施策をどうしてやるのかということです。

意味不明のわかりにくいことは何の効果もなく、そして議会を開いていると支持率が下がるという教訓から予算委員会も開かないという策を弄したにもかかわらず、結局、投票率過半数割れにもかかわらず、いつもは投票率が下がると保守に有利になるというのに、参議院自民党の過半数割れという事態になりました。マスコミの懐柔策が功を奏して、「自公過半数を確保」という大方の新聞紙面や報道になりました。そこで、「憲法改正を争点にして、与党過半数を獲得したから、憲法改正論議を進める」とか言い出しました。もう笑い話です。ちゃんとした分析もできないのです。過半数を確保したのは、公明党が伸びたからですが、公明党は内部からのつきあいで憲法改正に今回慎重姿勢をとっていたのです。

さて、このあきらかな安倍失政の中で、韓国はGSOMIA破棄に出ました。時局は流動的です。そもそもトランプは選挙公約で、アジアの米軍経費の削減—各国負担増をだしていました。GSOMIA破棄と駐留軍費の各国負担という中で、そもそも軍事同盟がどうなっていくのかという議論も起きています。少なくとも韓国では、です。ホームズ海峡の有志国連合の話も出ています。日本は、この間アメリカがいうことには真っ先に賛成するというこのことをやってきましたが、今回はそもそもトランプの意向もはっきりしないこともあるのですが、石油という「生命線」のことがあると、慎重姿勢を示しています。有志国軍に入るか、イランとの関係維持を考えて、独自行動をとるか様子見をしています。一緒に動くと標的にされるから、独自の友好的関係で軍事的なことに巻き込まれないという主張です。この論理は東アジアにも適用できます。「瓢箪から駒が出る」ということわざがあります。そもそも軍事同盟を結ぶより、外交交渉で平和的關係を構築していくことこそが、利益になるという見通しも出てきているのです。これはずつと前から言われている

ことですが、憲法9条—平和憲法を世界の憲章に、すべての一切の軍事同盟破棄を、というスローガンも出せます。そもそも、核廃絶から軍の縮小・破棄、真の平和をとということにまでそれは広げていけることです。

さて、そもそも韓国の「リベラルな」といわれる文政権もナショナリズムを煽っているのですが、そこのナショナリズムと日本の極右安倍政権は位相が違います。被差別のナショナリズムは全否定はできません。(民族主義という意味でのナショナリズムで) 民族差別に反対しなくすためのアンチテーゼという意味ももっています。ただ、単なる反発のアンチテーゼから真に問題を解決していく、民族ということを文化的独自性という意味以外にはなくす、すなわち民族概念自体を脱構築する、民族差別をなくすジーンテーゼに進むために、ナショナリズムを超える必要があります。安倍政治のナショナリズムは、国家主義そのものとしてナショナリズムです。勿論、民族主義と国家主義が一体になった、「反米愛国」という右翼の民族主義のスローガン(かつて「左翼」の一部もとらわれていたスローガン)もあります。今、むしろこちらの側がおきてくることもしっかりみすえておかななくてはなりません。これにはきちんと対峙して、つぶしていかななくてはと思います。それ以前に国家主義的な安倍政治を(これは戦争とファシズムへの道を阻止するということでも)終わらせなくてはなりません。

(み)

(「反差別原論」への断章)(12)としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 83号」アップ(19/9/18)
- ◆ホームページをリニューアルしました。協同作業を追求してきたのですが、うまく進められず、別にあきらめた訳ではないのですが、論的な深化にウエイトをおきます。
- ◆トップページのIに「ホームページの見方・検索の仕方」という項目を作り、アクセスしやすいようにしました。まだ、工事中です。「アーカイブ」を大幅更新しようとしています。もう少し時間がかかります。サブホームページ「反差別資料室C」の文献表をアクセスしやすくし、「反障害-反差別研究会」のメインホームページとリンクできるようにしています。だいたいの作業は終わったのですが「アーカイブ」がまだです。新しく購入した本、読書した本は随時追加していきます。

読書メモ

トロツキー学習の続きです。実は一応第一次トロツキー学習を終えて読書メモも書き上げているのですが、また「通信」の分量が増えるので、次に回しました。他の革命史にも入っていつています。ドイツ革命、パリ・コミューン、スペイン革命と続けて、レーニン第三次学習、ローザ・ルクセンブルクと進み、従属理論を押さえます。また変更するかもしれません。

たわしの読書メモ・・ブログ 505

・トロツキー／藤井一行・左近毅訳『われわれの政治的課題—戦術上及び組織上の諸問題』
大村書店 1990

この本は、ロシア社会民主労働党の第二回大会で、レーニンが組織論として中央集権制ということ突き出し、トロツキーはメニシェヴィキとしてその批判をします。それで、レーニン派はボリシェヴィキ(多数派)を形成し、トロツキーはメニシェヴィキ(少数派)として、袂を分かちます。トロツキーはまもなく、メニシェヴィキは離れますが、1917年の二月革命の後、トロツキーはメジライオンティというグループを形成して、レーニンのボリシェヴィキと一緒に動き始め、七月に合流します。で、10月革命のときに、ふたりがいなかったら革命はできなかったとお互いに認める大きな役割を担うのですが。わたしはトロツキーにはそもそもレーニン批判があったのに、その内容をきちんと突き出しえなかったところで、スターリンのレーニン主義に負けたのだと言い得るのではないかと考えています。

ここまで読む予定はなかったのですが、この本はトロツキーの第二回大会を前後してのレーニン批判の内容で、これがロシア革命史の総括の核心的なことではないかと、ここまで広げました。トロツキーの批判はかなりの確で、まるで「予言」のように、その批判、ジャコバン主義として批判していた内容が現実化していきます。トロツキーの提言の一部は方針や政策として、特に経済政策などについてスターリン派にもとりいられるのですが、その批判はまさに今日スターリズムとして批判される内容で負の歴史を形成してしまいました。

この本の論点は、中央集権制 代行主義 民主主義 現在の社会変革運動に関わる論点として継続している課題です。わたしのまとめの論攷は歴史学習の最後あたりで。

さて、わたしの関心は、なぜ、レーニン主義批判をしていたトロツキーがレーニン主義者になったのか、ということです。もう少しトロツキーを読み進めます。トロツキーの理論の核心、永続革命論で二冊、レーニン主義への転換とトロツキーのロシア革命の総括を探るために『わが生涯』を最後に。

論攷を先送りしているので、久しぶりの切り抜きメモです。

「「職業革命家」集団は自覚的なプロレタリアートの先頭を進んでいたのではない、行動していたかぎりにおいてはプロレタリアートにかわって行動していたのである。／この政治的代行の実践が・・・」87P・・・前衛論、代行主義批判 プロレタリア革命とプロレタリアートに依拠するインテリゲンツィアの革命 労働者を教育するという奢り

「それはしばしば一種の密輸品のようなものであった。」95P・・・マルクス主義などの資本主義の発達した国で作られた理論の「密輸品」 レーニン外部注入論もここから

「組織フェティシズム」95P・・・総括の核心

「「代行」というものはわれわれ革命家にとっては革命的な社会民主主義者にとってよりもずっとふさわしくないことをことわっておかねばならない。」117P

レーニンの理論に対するトロツキーの反語的説明「基本原則なら、話はべつです(話せないことはないという意味) ……例えば分業……非合法活動……規律……それに、そもそも中央

集権主義……中央委員会がコントロールできるようにというわけで……もちろん、「職業的
革命家の組織」と呼ばれているもの……そして民主主義反対……以上が原則です。」 123P

「手段が目的に刃向かい、形式が内容に刃向かう……」・・・代行の手口 142P

「運動の原則の純潔性や「正統性」をあたかも保持すると称して、「代行」の病理を運動全
体に押しつけるのは、墓穴を掘ることを意味する。」 142P

「規律が意味を持つのは、みずからが正しいと思うことのためにたたかい、そのためにこ
そみずからに規律を許す、そういう可能性が保証されている間だけだからだ。ところが、「権
利の剥奪」、すなわち思想的影響をおよぼすためにたたかう可能性が奪われる見通しに一定
の方向づけがなされると、その存立の問題は、権利の問題 (Rechtfrage) から権力の問題
(Machtfrage)へと変わる。」 150P・・・この後に、もっと詳しい論攷

「インテリゲンツィアの性質というものは、ことほどさように矯めやすく軟弱で、一度か
ぎり作図されたダイアグラムのます目なんぞには収まらないのだ！その同じ「性情」が、
——革命期にはインゲンツィアをジャコバン主義に——つまりダイナマイトまたは民衆蜂
起の「構想」で武装した中央集権的な陰謀組織へと向かわせ、革命後にあっては、インテ
リゲンツィアを改良主義へ、階級闘争のするどいきれ味を鈍らされる方向へと向かわせる。
これぞ社会発展の弁証法である。」 162P

「組織の物神崇拜」 179P

「ジャコバン主義とは、超社会的な「革命の」カテゴリーではなく、それは歴史の産物で
ある。ジャコバン主義とは、ブルジョア社会が自己解放で緊張が高くなった時代における、
革命のエネルギーの最高度の緊張モメントである。それは、ブルジョア社会が与えること
ができたラディカリズムの極致であり、——それも内的矛盾の発展によるものではなく矛
盾の廃棄と抑圧によって生まれたものであって、理論では抽象的な市民にうたえること
をてこにし、実践面ではギロチンをてことするものであった。」 187P・・・この後にもジャ
コバン主義の詳述 187-190P

「ギロチンは単に政治的自殺の機械による手段にすぎず、また自殺そのものはかれらの希
望のない歴史的状況——私有財産制にもとづいた平等を唱え、階級搾取のわく内での普遍
的モラルを説いた者の、運命的にたどり着いた果てであった。」 193P

「プロレタリアートの独裁がプロレタリアートにたいする独裁」 209P

「「社会民主主義者・ジャコバン主義者」にとっては、組織代行システムの恐いもの知らず
の代弁者たちにとっては、巨大な政治・社会的課題というのは——階級を国家の支配への
準備させることであり——それを組織・技術の課題に——権力機構の構築にすり代えるこ
とである。」 209P

「プロレタリアート独裁をプロレタリアートにたいする独裁に、階級の政治支配を階級に
たいする支配へとすり代える・・・」 210P

解題・・・左近毅

「中央集権主義一般から演繹して、レーニン流のそれをトロツキーが「官僚的中央集権主
義」と限定している点である(同上報告書、三四ページ)。少なくともこの段階でトロツキー
は、後年のグラムシらのように、党組織の中央集権主義を官僚主義的なそれと民主主義的
なそれに分類していたことがわかる。」 242P・・・民主主義的な中央集権主義はありえるか？

「革命党の組織原理は単に闘争のための戦術的組織形態であるにとどまらず、革命後の社会における支配と統合の原理のモデルとして二重の意味合いをもっている。」 252P・・・このことからの中央集権主義と強圧的運動のとらえかえしの必要性

「1923年にトロツキーの提案した「労働者民主主義」の党への導入案を圧殺していったプロセス・・・」 257P

党の方針の党員のいろいろな立場からのとらえ返しの必要性 258P

たわしの読書メモ・・・ブログ 506

・トロツキー／対馬忠行・榊原彰治訳『1905年革命・結果と展望』現代思潮社 1975

この本は、トロツキーの永続革命論の原型を示した本です。1906年に最初に出されそれはすぐに押収されて広まらず、1919年に改めて、1915年の一論文「権力のための闘争」という文と1919年版の序文をつけて出された著書。レーニンは1919年版を初めて見たという話で、レーニンはこれを観て、これまでのトロツキーへの批判がずれていたということを知ったという話です。トロツキーの永続革命論と4月テーゼ以降の革命論はかなりシンクロしています。トロツキーサイドからもレーニンの四月テーゼを読んで、古くからのボリシェヴィキのメンバーが動揺している中でいち早く支持を表明しています。

この本の中であらためてとらえ返していること。トロツキーとレーニンの違いは、農民のとらえ方の違い、トロツキーは「農民の支持によるプロレタリアート独裁」のようです。レーニンは当初は「労農の民主的独裁論」です。わたしは、この本で出てきていない、ソヴィエトのとらえ方の違いから逆のように思っていたのですが、確かにトロツキーにはメニシェヴィキと同じように農の位置づけが低いということはあったようです（トロツキー自身はその批判に繰り返し反論しています）。後は、そもそも最初レーニンとの間を分かったレーニンの中央集権制という組織論ですが、トロツキーの1915年の論文とかも通じてトロツキーのボリシェヴィキ化ということがすすんでいたのでは、ととらえられるのですが、トロツキーの変遷をたどるには他の論攷をもう少し読み込む必要があります。

永続革命論は不均等発達論による革命の可能性がロシアにもあり、そこから他の国への革命との連携(連続)の中で、革命が永続的に発展していくということなのですが、このあたりレーニンが四月テーゼで突然ロシアは民主的労農独裁が可能だとしたこととリンクし、また、わたしは後期マルクスの、アジア的生産様式論というところから、それまでの単一的発展方式といわれる唯物史観の見直しをしていたこととも通じるのではないかとも言い得ます。ロシアは他の先進国の革命と連続なしには、プロ独まではいきえても「社会主義」へは移行し得ないとしていました。このあたり実際のロシア革命の道行きとまさに、「予言的な」内容をもつていたとも今日とらえられるようです。

さて、1930年にトロツキーは『永続革命論』という本を出していますので、それが次の学習。それとトロツキーの『わが生涯』を読んでからトロツキーを簡単にまとめます。

とりあえず、切り抜きメモです。

カウツキーと共鳴する不均等発達のとらえかた 65-7P

二月から十月までの道行きの、トロツキーの「予言的」とらえ方 71-2P

「主導権は労働者階級に属すべき」 73P

ロジコフの押さえ①生産力の問題②協同組合的生産③階級形成 91-101P・・・トロツキーの批判とともに検討の必要、特に②

「永続革命論解説」(対馬忠行)

永続革命論骨子 12 170-5P

レーニンとトロツキーの農民のとらえかたの違い 192P

たわしの読書メモ・・・ブログ 507

・トロツキー／森田成也訳『永続革命論』光文社(光文社古典新訳文庫) 2008

この本は、前の読書本が永続革命論の初期形成時に書かれたのに対して、永続革命論をまとめた論攷。「左翼反対派」といっても、元々ブレブレのラディックが、スターリン派になっていく中で「永続革命論」批判をなし、それに対してトロツキーが反批判という形を軸にして論攷をまとめた本になっています。

永続革命論はトロツキーがパルブスの影響を受けつつ形成した理論ですが(パルブスの理論はプロレタリア革命ではなく民主主義への永続革命なのですが)、これとレーニンの四月テーゼがシンクロしていたのです。レーニン四月テーゼが出されたとき、トロツキズムなどの批判もでたようです。当時、マルクスの唯物史観で、発展段階論ということがあって、飛び超えは不可能という図式が定着していたのです。その中で飛び越えるのではなく、プロ独の中で民主主義革命も同時に成すというところで、プロレタリア革命→プロ独、プロリタリアートの権力奪取は可能だ、そしてその革命は世界革命に綱がたつて行く革命でそれがないと革命は崩壊するだろうというのが永続革命論です。そこで、農民の位置づけが問題になります。トロツキーもロシアは8割農民だということで、「農民の支持を得た」とか「依拠した」ということは書いているのですが(「支持」と「依拠」は日本語では違うのですが、ロシア語的にどういう意味になっているのか、とらえ返しが必要です)、農民は独自の革命党は作り得ないとおいていたようです。レーニンは最初はブルジョア革命→プロレタリアートの革命とおいていたようで、当初は労働者と農民の民主的独裁論を突き出していました。革命的農民党の可能性についてもいろいろ考えていたようです。トロツキーはその可能性を否定しています。そもそも、マルクスのロシアのナロードニキ、ザスーリッチへの手紙の中で、ロシアのミールに言及していて、マルクスは単線的生産様式論から、ミールを含むアジア的生産様式論を押さえたところで、今日反差別論的などころから批判→とらえ返しがはじまっている進歩史観的などころからの転換のようなことも問題になっていきます。このミールあたりに関することはトロツキーにもレーニンにもほとんど出てきません。この本では解説の中で少し出てきます。そこで、資本主義の「発達」は第一次産業(農・牧畜・漁・林)→第二次産業(工業)→第三次産業(金融)と展開していくのですが、それは資本主義的発展としてあるわけで、「社会主義」的にどうなるのか、そこにおいても同じ図式が必要なのか、別なのかという問題があります。確かに、農の発展でもここでト

ロツキーが書いているように鉄道網や電信などの発達が必要になり、また農業機械の生産という意味での工業の必要性も出てきます。でも、逆に農がなければ生きることさえできないという規定性もあります(そのあたりの農の支持がない、依拠がないというところで、「調達」とかやってしまったのですし、十月革命後に農地の分配とかいう政策までとってしまったのです)。それらは、結局統一した、しかも世界的な分業の中での世界革命という意味での永続革命の必要性というところにもリンクしていくことです。トロツキーは繰り返し、「農のとらえ返しが無い」と古くからのボリシェヴィキから批判されているのですが、それは誤解という面もあったにせよ、確かに農の革命性を否定したという意味での、もう一段のとらえ返しが必要になっています。ミールは、もはや過去のものとなって、その革命性に依拠できなかったのか、単にボリシェヴィキ主導での農民の組織化の失敗の問題なのかということのとらえ返しが必要になっています。二月から十月に至る過程で、農民一揆的なことがおき、しかも「土地はみんなのものだ」というスローガンが出ていたわけで、それは単に一揆的なことにしかならないことなのか、そもそも組織化する革命勢力がでてこなかった故なのか、革命組織がきちんと農民をとりこめなかっただけ(そこにおける方針の問題)なのかとかいう問題があるはずです。

さて、トロツキーはこの本の中でも、自分とレーニンとの関係において、レーニンが常に正しかったと書いています。このあたりレーニンのロシア革命におけるカリスマ性ということがあり(これ自体が大問題で、きちんととらえる必要があります)、またトロツキーは、テルミドール派よりも自分が方がレーニンに近いというところでのレーニンの正統性から相手を批判するということがあったようなのですが、そもそも1903年にトロツキーはレーニンの中央集権組織論を批判してボリシェヴィキと袂を分かったのですが、そのことを撤回しています。で、今日的にとらえ返すと、まさにスターリンの官僚的支配がそこから来ているわけで、むしろ初期トロツキーが危惧していた状況がつけられたのです。そのことをどうとらえるのかという問題があります。レーニンのトロツキーへの批判ということのもうひとつは、「調停主義者」という批判です。これは、自分が主体的に動いていかないという意味での批判としてはトロツキーの自己批判も正当ですが、ただ、わたしはここにもレーニンの外部注入論的に核を作るという形の運動で、繰り返しボリシェヴィキ的純化を図ろうとしていたところでの、トロツキーへの批判があったので、むしろソヴィエトというところで、ペトログラードで1905年、1917年二度にわたってソヴィエト議長を担った、トロツキーの民衆運動的手腕という面が、そこにおける、そもそもソヴィエトの位置づけ自体がほとんど出てこないという問題をどうとらえればいいのかということがあります。このあたりは、結局ボリシェヴィキというところで「客分」的なトロツキーに頼るしかなかったという意味では、レーニンは失敗したということがあったわけで、そういう運動—組織論自体の問題もあって、ロシア革命の歪曲が生じたのではないのでしょうか？

トロツキーの永続革命論は後期マルクスの単線的生産様式の展開の自己批判的にとらえ返しが、永続革命論の中身としての不均等発展論や複合的発展論と結びついていくのですが、そのあたりの研究はどうなっているのか、突き止める必要を感じています。

さて、この本を読んでいてひとつの大きな問題が浮かび上がってきます。それはスターリンが一国社会主義論を突き出しつつ(スターリンの一国社会主義論も結局自国だけには不

均等発展論を認めているので、そもそも論理的整合性がないのですが)、他の国の一国社会主義革命論を認めず、二段階革命論として革命闘争の圧殺をコミンテルンを通してやっていく、ロシア一国の利害に他の運動を従属させるという、永続革命論とは真逆のことを積み重ねたわけで、このあたりの批判をもう少し詰めたと思います。もう一冊『レーニン死後の第三インターナショナル』を追加読書します。もう一冊中国のトロツキー派の中国革命のとらえ返しの本も一冊。

永続革命論は強引な革命論なわけで、その強引さの中での反作用としての官僚的強権支配ということが起きたのか、それは後で解消できることなのか、それは暴力革命論や「現実的な運動の中における関係性は、未来社会を映し出している」というテーゼをどうとらえるのかの問題にもつながっていきます。このあたりは一連の歴史学習の中で、まとめる作業をします。

民族社会主義 後進国革命論 不均等発展論と永続革命論 17P

ロシアをすべての上に置く 不均等発展論での物神化 23P・・・コミンテルン批判

ブハーリンの「亀の歩み」論 33P・・・ブハーリンの初期は左派、後はスターリン派のイデオログ、更に「右派」として粛正されています。

農民は革命党を建設し得ない 51P・・・プロレタリアートの党は結局プチブルの党になったのでは、プロレタリアートは革命党を建設し得ないという論理になってしまったのでは？ 依拠するとそのものの党との違い

永続革命論 55-60P

レーニンは正しかった 100P・・・トロツキーはレーニン主義者になってしまっていた

調停主義 104P

農地革命の問題を解決し得る勢力がなかった 140P

民主主義労農独裁 レーニン 140P

パルブス プロレタリアートの権力の奪取は社会主義への道ではなく民主主義への道 152P

鉄道と電信が国をつなぐ 工業が主導 166P・・・？農業がなければ飢える

農村 農業がなぜヘゲモニーがとれないか 216P・・・？中国は？

民主主義的独裁の否定 294P

レーニンは現実的課題 トロツキーは歴史的理想を追う 374P

複合的発展の法則 不均等発展論 391P

「永続革命論の弱い面は、革命の発展段階の規定に関して、とりわけブルジョア革命から社会主義革命への移行に際しての階級的勢力の再編に関して、明確さと具体性が不十分であったことである。」 422P

解説

ザスーリッチへの手紙にコメント 431P・・・ミール的なものはもう消えたのか？

二段階「連続」革命論 436P←意味不明 永続化革命論からの批判 プロ革命には民主主義革命を含む

レーニンの革命的農民政党の形成への期待 438P・・・不可能だったのか？

レーニンとの対立 442P

機械的段階論と一国社会主義論(特殊的)448P

建設の訳 ロシア語では「建設している」と「建設した」ということが語として分けられているのを訳し分け 456P・・・*一国社会主義を建設している過程と済みを訳し分けることにつながる*

後進性と後発性の訳し分け 458P→後発性の特権 461P

複合発展の法則 462P

たわしの読書メモ・・・ブログ 508

・トロツキー／森田成也・志田昇訳『トロツキーわが生涯〈上〉〈下〉』岩波書店(岩波文庫)
2000 2001

この本は、トロツキー関係学習の6冊目です(分冊されているのを1冊として)。で、トロツキー学習だけでも、一生をかけても終わらないということがはっきりしてきました。そもそも、レーニンも第一次学習の際にかじっただけで、深く踏み入りませんでした。必要に迫られて第二次学習で何冊かやっとな読みました。トロツキーは『ロシア革命史』だけで捨ておけるとしていたのです。ですが、奥が深いのです。運動史の核心的なことがここにも含まれているということを感じ始めています。でも、ひとがやることには限りがあります。とても、奥深くふみいれません。というところで、表面的になぞっただけで、論及的な文を残すこと自体とんでもないことなのですが、それでも、わたしには反差別共産主義論を生み出そうという立場があり、そこから、ドンキホーテと批判されようと書き記しておきたいという押さえがたい衝動が起きてきています。

これはトロツキーの自伝ですが、そこにリンクして、この本だけでなく、これまでの本の内容から、トロツキーを過渡的にですが押さえおきたいと思います。

歴史学習の終わり頃に、また論考を少しでも深めた文を書き、その中でかなりの修正的文を書くことになるかもしれません。

そのようなところで、あくまで過渡的なところの文としてメモを残します。

1903年の社会民主労働党大会で、トロツキーはレーニンの組織論—中央集権主義を批判して袂を分かったのですが、その後レーニンが正しかったと自己批判して、レーニンに合流します。レーニンは、トロツキーへの批判として、この組織論と「協調主義者」という批判を繰り返しています。そもそもトロツキーの性格的には、組織論を批判したところと「協調主義」と言われていることの裏返しとして仲間への強い思いということがあります。そして、彼には文学志向があり、政治的なことへの嫌悪ということ、いわゆる権力闘争ということへの忌避があったのだと思います。一方で彼は、まさに革命運動に身を投じ、まさにそこに生きていました。そこでのジレンマがあったのだと言い得ます。結局彼が、初期の組織論を捨てたのは、まさにレーニンの中にロシア革命の可能性をとらえ、そこへ賭けるということで、武装蜂起的革命論者になり、レーニンはすべて正しい、正しかったというレーニン主義者になったのだとも言い得ます。スターリンはレーニンを神格化することによって、そこでレーニン主義の正当な継承者として、自らもカリスマ化しようとした。それは右からのレーニン主義だったのですが、トロツキーもまさに「レーニンは

いつも正しかった」としてカリスマ化することによってレーニンにかけて強力に革命を推進することによって、そこに永続革命の可能性をとらえたのではなかったのかととらえています。そこで現実的にレーニンとトロツキーの違いということは当然あり、むしろそこで自らをきちんと突き出さなかったところで、スターリン派のトロツキーとレーニンの違いということでの批判を許し、また、レーニンの中央集権主義によって、分派の禁止とか、問題があってもそこで一致団結していくということで、批判を躊躇していく構造が出てきてしまったのです。まさに、「左翼反対派」への弾圧の中で自死したヨッフエがトロツキーに宛てた遺書の中で、「トロツキーが正しかった。なぜ、レーニンのように一貫性をもって自らを突き出さなかったのか」という提言があったのです。他の旧ボリシェヴィキのメンバーは実務的なところではやりきれたとしても、大きな方針のようなところではきちんと方針を出せないで、レーニンの指導下で対立するか、従うようなところ、イエスマンにしかならなかったことに反して、トロツキーはきちんと一貫した方針が出せたのです。そして共鳴しながら時には不協和音になり、調整しつつ、基本的にはもっとも共鳴することとして意見を交わしながら動き得たのです。トロツキーはそもそも軍事的なところが好きで引き受けたわけではなく、レーニンから「他に誰がいるのだ」と言われて引き受けざるを得なかったのですが、トロツキーの軍事的責任者としての体験から、組合への軍事的献身の要求などを出し、中央集権化をまさに自らのものとしていくのです。軍事的な関係性を労働組合的なところに持ち込もうとして批判を受けたりしていたのです。それでも、トロツキーはひととひととの関係性を押さえる、初期の思想は消失はしていないのではないかと思います。ですから、軍事的なところで、軍隊内の敵対行為に対する処刑やボリシェヴィキへのテロ殺害をやったエス・エルの処刑などにも、一刀両断的なところでやっています。

さて、レーニンの四月テーゼの内容が、トロツキーの1905年を前後して出された永続革命論とシンクロしていたことがありました。そこで、トロツキーはレーニン主義者になっていくのですが、レーニンはトロツキーの永続革命論の本は読んでいなかったようで、独自に到達したようです。トロツキーの永続革命論は二つの内容を持っています。ひとつは、プロレタリアートは農民の支持を得て(「依拠して」)権力を握りうる、そして、それが継続し得るには、もうひとつ、世界革命と連動していくことが必要であり、それは握った権力で、内からも連続した革命の推進をしていく、という内容の提起です。

以後、基本的には共鳴しつつ、トロツキーとレーニンは互いに意見交換しつつ、共にどちらがいなくてもロシア革命はありえなかったと言える指導力を発揮します。トロツキーとレーニンの最大の衝突はブレスト・リトフスク条約を巡る対立です。これは永続革命論の他の国の革命運動との連結、ここではドイツ革命とのリンクの問題でした。互いに、世界革命とのリンクは捨てはしていないのですが、レーニンは現況をどうとらえ、それに合わせてどう方針を出していくのかということで、レーニンの全権大使トロツキーへの提起として、「ドイツには今革命的状況はないから、とりあえずは、ロシアの革命を守るというところでドイツ政府の要求を全面的に飲む」という内容の条約の締結をします。永続革命論の内の推進と外との連携ということでのレーニンとトロツキーのお互いのジグザグが、いくつものことで出ていました。ポーランド革命戦争ではトロツキーとレーニンの立場は

逆になります(これはここには書かれていないのですが、そもそも「民族自決権」の問題ともつながります)。白軍との攻防でペテログラードからの撤去ということでは、レーニンは他の者からも含んで説得されて「条件付き」死守に転じます。その他意見交換の中でいろいろ取り込んでいったこと、暗黙に了解していったこと多々、農民の評価問題、土地の分配、新経済政策、旧官僚の取り入れ、特に軍における旧将校のとりいれなど。

さて、きちんと書かれていないことで、大切なことがいくつかあります。ちょっととらえ返してみます。

まずは、クロンシュタットの反乱のことです。そもそも、クロンシュタットの反乱でどういう要求が出されていたのかその中身を押さえる必要があるのですが、これはボリシェヴィキも含んだ反乱だったようで、それを、この本の中では出てこないのですが、インターネットで検索するとトロツキーが「鉄の箒で一掃した」とか発言したよう、よく分かりません。トロツキーはロシア革命の過程でクロンシュタットに何度も出向き、そこで演説をしてクロンシュタットの革命拠点化を進めた立場がありました。そこからすると、トロツキーが出向き、反乱兵士を説得することではなかったかと、後世の立場から見るととらえられます。これは、ジノヴィエフが担当していたようですが、トロツキーはいろいろ抱えていて動き得なかったということもあったとは思いますが、この本の中では、どうもトロツキーは、左翼冒険主義という批判の下で現在の経済的基盤がないということで、その基盤を作るためのネップの推進ということで、問題をトロツキー自身もすりかえたのではないかと推測しています。

さて、もうひとつ「トロツキーは農民問題が欠落している」という批判が繰り返し出てきます。トロツキーも「農民から支持されたプロレタリアートの独裁」とか「農民に依拠したプロレタリアートの独裁」というスローガンを出しています(「支持」と「依拠」は全然意味が違うのですがこれは翻訳の問題かどうか分かりません)。そもそも社会民主党は農民層に食い込んでいず、社会革命党が農民層に入り込んでいました。なぜ、社会民主党は当時8割を占める農民層の取り込みをないがしろにしたのかということであれば、貧農や雇用農は別にしてとしつつ、「層としてはプチブル」規定をしていたことがあったのだと思います(そもそもレーニンの外部注入論自体がプチブルの思想という批判も出てきます)。このあたり、わたしはそもそもマルクスのロシアのナロードニキへの「ザスーリッチへの手紙」で書いた、ミールということはどうとらえていたのかの問題もあります。もうミールのなことは崩壊していたのでしょうか？ 二月から十月にかけて農民の一揆的動きの中で、「土地はみんなのものだ」というスローガンが出ていました。これはミールの伝統の中で出てきたスローガンで、そこでミールということを活かす農地改革の余地がなかったのか、と考え込んでいたのですが、この問題に踏み込むには膨大な資料の読み込みが必要になり、とてもやれそうにありません。

さて、そもそも労農独裁ということでのソヴィエトの独裁ということが出ていました。ですが、そもそも1905年1917年二度にわたってペテログラード・ソヴィエトの議長だったトロツキーのロシア革命の総括で、そのソヴィエトのとらえ返しができません。少なくとも、1905年はまだレーニンの中央集権的組織論を批判していたときで、その意味でソヴィエトという形態が大きな意味をもっていたはずです。そもそも、レーニンが推進した

中央集権制でいくと、ボリシェヴィキへの純化ということになってしまいます。ボリシェヴィキは、二月革命以降は繰り返し民主主義批判を繰り返していきますから、他の党派を切り崩していく場としてのソヴィエトということしか見ていなかったのでしょうか？ とにかく、農民層の支持をえていたエス・エルの左翼エス・エルが反乱を起こし排除され一党独裁になってしまったところで、ロシア革命は決定的な変節の道を進んでいきます。

もうひとつの大きな問題は民族問題です。そもそも社会民主党建設初期から民族問題は大きな問題としてありました。各民族ごとで発言していくというスタイルも出ていたようです。そもそもレーニンの民族問題に関するテーゼ「民族自決権」の思想自体がフィクションだったという批判があります。わたしは民族問題が結局レーニンにとって、やっかいな対処しなければならない問題という域を超え得ず、そこにおける反差別の運動のエネルギーを見ようとしなかった、そもそも差別＝階級支配の道具論は、そもそも階級自体を差別としてとらえられないということからきているとわたしは批判しています。そもそも中央集権制からすると、民族自決は中央集権に従属させられます。自決権の思想は、「自治共和国」作りとして進んだのですが、そもそも「自治国家」ということにおいても、連邦に従属させられる「自治国家」にしかありません。永続革命的に国家が死滅しない限りですが。そもそも民族ということ自体が差別ということがあるから、民族があるというひとつの物象化なのです。ただし、差別がある限り、そのことは反差別として定立させる必要があります。そのあたりが、民族問題でのレーニンと論争を交わしたローザへの批判とは異なります。そこで残る問題は、自分の選択した言語で教育を受ける、コミュニケーション言語として使用する「言語権」の問題と文化の独自性の尊重の問題です。長くなるので、これについては別稿で。

民族問題は、スターリンがグルジアという少数民族の出ということがありました。しかもスターリンがレーニンの死の直前に自分の民族の自決権的なところで動く自治政府に対して、弾圧的なことをしたというところで、レーニンがスターリン書記長辞任を求める爆弾を仕掛けようとしていました。そして、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフがユダヤ人だったということで、その差別を利用したスターリン、スターリン派の攻撃もありました。差別問題では、「自らの被差別の問題で戦い得ない者は、階級闘争を闘い得ない」というテーゼがあります。そして、逆に、自らのその「出自」の仲間に対しても差別的になっていく構図も出てきます。レーニンもその内容に通じることを話しています。スターリンの根の深い猜疑心の形成に、この民族問題をきちんととらえられなかったことがあります。トロツキーも、わたしはトロツキーの革命へのエネルギーはユダヤ人差別に対する潜在的怒りのようなことを感じているのですが、トロツキー自身は、正義感のようなことを突き出しています。それでいて、レーニンからの代表的なことに就任の提起に対して、方便的なニュアンスも出しているのですが、「自分はユダヤ人だから」として辞退しようとしていることが一度ならずあったとこの自伝で書いています。そのあたりの非対象化が、トロツキーが、革命の主導権をとりそこなかったことにあったのではないかと、わたしはこの本を読みながら感じていました。

さて、トロツキーが革命の主導権を取り損ねたことでは、スターリンを甘く観ていた、スターリン主義ということで見えてくることをきちんととらえなかったこともありました。

とにかく、スターリンの一国社会主義でも継続・批判の中で修正を生み出していけば永続革命につながるのではという客観主義的なところにとらわれていたのではとも思えるのです。疲れ果てていたとか、永続革命が外につながるところで見通しがつかなくなっていた、とかもあったのですが、権力闘争ということを外的にしか観ていない甘さがありました。誰がリーダーシップを握るかというところで、スターリンやジノヴィエフは前に出たのです。それがまさに権力闘争になった(むしろなぜそのようなことが起きるのが問題ですが)、内なる権力闘争のようなことに意識性がなかったということもあります。

トロツキーは現場・現場できちんと方針を出し、そして皆を鼓舞しています。トロツキーは軍事を嫌いだっただけですが、軍事会議議長専用列車を前戦近くまで出し、内戦での白軍との決定的場面では、敗走する軍の向きを敵に向けさせるために、馬に乗って「連隊長のような」ことまでしていました。通常軍の司令官は表に立ちません。かれがあえて、そのように表に立ちえたのは、レーニンとの一体感があったからだと言い得ます。10月の蜂起の準備のときも、レーニンは暗殺と逮捕を逃れるために地下に潜っていて、トロツキーが現場指揮の最高責任者でした。それなのに、スターリン派はトロツキーと反対左派に反レーニン主義の汚名をかぶせて排除していったのです。そして、スターリン派は自らが総体的方針を出せない中で、左派のみならず、後に同じく粛正していった反対派の方針をこっそりと取り入れていったのです。トロツキーも、未来への投棄として、反対派としてもスターリン・ロシアに方針を取り入れさせようとしたのですが、誰がこのスターリンの大粛正を予想し得たのでしょうか？ 岩波文庫のトロツキー関係の本に、人物索引が付いているのですが、自死に追い込まれたひと、粛正で殺されたひとの記載が次から次に出てきます。ちゃんと生き延びたボリシェヴィキの方が極めて少数なのです。そこで、もうひとつの大きな疑念が出てきます。トロツキーは、この本自体が反対派の粛清に使われる可能性をどこまで考えたのでしょうか？

スターリンの一国社会主義の建設と粛正の歴史からするロシア革命自体は負の遺産しかないのです。そのことをどう総括するのか抜きにして、もうこれからの社会変革運動自体がなり立たなくなっています。その総括の中から、これからの運動に活かし得るさまざまな貴重な教訓も出てくるとは言い得ます。この本がスターリン派の粛正に使われた可能性の話を書きましたが、それでもこのトロツキーの本は、これからの運動のための総括のために貴重な資料になっています。勿論、ロシア専制時代のナロードニキのテロに始まるロシアの特殊性とレーニンとトロツキー理論自体の検証もなしつつです。

トロツキーのひとをとらえる鋭い感性、そして、そこにひとりひとりの生があった、というひとの息吹をこの本は描き出しています。それは、ある面協調主義として批判された中身でもないかと思えるのです。そのことをとらえ返しながら、多くの死した、殺されたひとたちの思いにはせながら、時には涙しながら、この本を読んでいます。

トロツキーの永続革命論はローザの継続的本源的蓄積論と相俟って、従属革命論や世界システム論、そしてネグリ／ハートの『<帝国>』につながる新自由主義的グローバリゼーション批判論というところまで射程が伸びています。その底にある、反差別ということから論を形成していく歩みを続けて行きたいと思っています。

切り抜きメモ

(上)

「裕福な農場主の息子であった私は、被抑圧階級というよりはむしろ、特権階級に属していた。家族や家の者が話す言葉はロシア語とウクライナ語のちゃんぽんだった。ユダヤ人が学校に入るときには確かに一〇%枠があったし、そのために私は一年を棒に振ったのだが、その後、私はずっと首席を通したので、一〇%枠の弊害を直接には感じなかった。」

188P・・・トロツキーはそもそもプチブルの出、しかし、民族問題でのエネルギーが潜在的にあったけど、それはエリート性で自覚的には出ていない

「ポーランド人学生に対する歴史教師の偽装されたいやがらせ、ドイツ人学生に対するフランス語教師のビュナンドの卑劣な言いがかり、「ユダヤっ子か」と言って頭を振ったロシア正教の司祭の態度、これらはいずれも私の心を深く傷つけた。こうした民族的不公正はおそらく、私が現体制に不満を抱くことになる隠れた動因の一つであったろう。だが、この要因は、私の場合、社会的不公正の他の諸現象の中に溶け込んでしまっていて、主たる役割どころか、そもそも独立した役割さえ演じていなかった。／特殊よりも一般を、事実よりも法則を、個人的経験よりも理論を重視する感覚は、私の中に早くから芽生え、年とともにしだいに強固になっていった。」 189P・・・無自覚的意識の形成、民族差別と性格の形成(客観化された意識の形成、潜在的な意識は強くなるけれど当事者としての主体性のなさにつながっていく)

「一度ならずあまりにも性急で誤った一般化に陥った。」 190P・・・レーニンとの対比もできる？

「私はかなりの長いあいだ史的唯物論に抵抗し、歴史的諸要因の多様性という理論に固執していた。周知のように、この理論は、今なお社会科学の諸理論に最も広く蔓延している。人間の社会活動のさまざまな側面を諸要因と呼び、この概念に超社会的な性格を付与し、その上で、自分たち自身の社会的活動をこれらの独立した諸力の相互作用の産物として迷信的に説明するのである。だが、これらの諸要因はどこから来たのか？ すなわち、それらの諸要因は、人類の初期の社会からいかなる諸条件に影響されて発展してきたのか？ こうした問題について公認の折衷主義者たちはほとんど論じていない。」 246P・・・逆に、わたしは問題を感じてしまいます。マルクスのアジア的生産様式論での論致は入っていたのだろうか、と。これは農民問題とリンクことです。

「私は、かつて革命に抵抗し、その次にマルクス主義に抵抗したように、そして後に何年にもわたってレーニンとその方法に抵抗したように、芸術に対しても抵抗したのであった。」 296P

「私は自分を中央集権主義者だと思っていた。だが当時の私は、幾百万の大衆を旧社会との戦闘に引き入れるために、革命政党にとってどれほど厳格で有無を言わせぬ中央集権主義が必要であるかを、完全には理解していなかった。」 323P・・・レーニン主義への転向としての自己批判

トロツキーがレーニンとの距離を置いている時代の、他者(クラーシン)を介しての共鳴 341P

トロツキーの文学志向 368-9P

「こうしたつきあい(オーストリアにおけるつきあいなど)を通じて私は、いかに異質な諸要素が同一人物の心理の中に共存しうるかを、そして体系の一部を受動的に認識することと、その体系を総体として心理的に感得しその体系の精神で自己を再教育することとのあいだに、いかに巨大な距離があるかを理解するようになった。」 406P

「他方、メンシェヴィキのその後の運命と党の組織的課題の評価に関しては、ウィーン『プラウダ』はレーニンの明晰さからはほど遠かった。私はなお、新しい革命が、一九〇五年と同様、メンシェヴィキを革命の道へと押しやるだろうと期待していた。私は、準備的なイデオロギー的淘汰作業と政治的訓練の意義を十分評価していなかった。党の内部発展の問題に関しては、私は一種の社会革命的運命論に陥っていた。これは誤った立場であった。それは現在のコミンテルンの陣営で私を批判している大多数の連中の特徴となっている無定見な官僚主義的運命論に比べればはるかにましである。」 435P・・・協調主義への自己批判、それでもエピゴーネンたちからの擁護、協調主義と中央集権主義の再度のとらえ返し (解説)

戦争と革命の「人格の絶対的価値」 588P→(下)337P

「トロツキーは、本書二九章「権力の座」において「人類の革命的経験をできるだけ明確にしておくことは必要であった。いずれは他の人々がやってきて、われわれが計画し開始した事業に依拠して、新たに前進するであろう」、と書き遺していた。」 594P・・・未来へ向けての現在の投企→(下)見つからず

(下)

「マルクス主義はみずからを無意識的な歴史過程の意識的表現であるとみなしている。しかし、心理的な意味ではなく、歴史哲学的な意味での「無意識的」過程がその意識的表現と一致するのは、それが絶頂に達したとき、すなわち大衆が自然発生的な圧力によって社会的因習の扉をたたきこわし、歴史発展の最も深い要請に対して勝利の表現を与えるときでだけである。こうした瞬間には、時代の最高の理論的意識は、理論から最も縁遠い最底辺の被抑圧大衆の直接行動と融合する。意識と無意識的なものとのこうした創造的結合こそ、普通靈感と呼ばれているところのものである。革命とは歴史のきわめて激しい靈感なのである。」 98P・・・ローザの民衆の自然発生的革命性への依拠に通じる内容。ここで、靈感にはインスピレーションというルビがあり、これは、直感や第六感という漢字を当てることでは?

「まったく唐突にウラジーミル・イリイチが尋ねたことがあった。「もし、白衛軍が君と僕を殺したら、スヴェルドロフとブハーリンでやっていけるだろうか。」 104P・・・レーニンが後継者として考えていたこと→トロイカの怒り 105P

トロツキーのユダヤ人での自分を表に出すことの躊躇 108P

トロツキーがユダヤ人であるところで「マルクス主義を学んだことがこうした気分を掘り下げ、積極的な国際主義に変えた。」 109P

(レーニンのトロツキーへの講和での説得の提言)「もし、われわれがドイツの革命の勝利のために破滅しなければならないとしたら、われわれはそうすべきであろう。ドイツ革命は、わが国の革命よりはるかに重要だからである。しかし、それがいつ起こるのかは、誰にも分からない。今のところはわが国の革命よりも重要なものは何もない。何が何でも、わが

国の革命を危険から守らなければならない。」181P・・・世界革命への連携の思いと現実主義的提起

「成功のための最も重要な条件は、次のことであった。すなわち、何事も隠さないこと、特に自分の弱点を隠さないこと、大衆をだまさないこと、すべてのものを公然とその本来の名で呼ぶことである。」207-8P・・・運動の原則としての誠実さ

「ウラル地方における農民の生活を自分の目で観察した際の印象に動かされて、私が新経済政策への移行を執拗に求めたという事実である。」273P・・・トロツキーはネップの受動的容認者ではなかったということと、農民問題を軽視していなかったということの言明。

「無秩序なゲリラ主義は、革命の農民的な底流の現われであった。したがって、ゲリラ主義に対する闘争は、プロレタリア国家体制を擁護するための闘争であり、その基礎を掘り崩しつつあった無政府主義的小ブルジョア的自然発生性との闘争であった。」274-5P・・・トロツキーがゲリラ部隊ではなく正規軍形成をやっていたことの意味？「プロレタリア国家体制」？

(ポーランド革命戦争を巡るトロツキーのレーニンへの提言)戦争の情勢と運動の情勢とのズレと違いの押さえ 310P

「この問題は戦時共産主義体制をとる限り不可避的に出てくるものであり、その意味で、私は労働組合の国家化を擁護したのである。」321P・・・戦時共産主義を脱して新経済政策をとった理由？しかし、国家の労働者への搾取ということ永続革命論的にどうとらえるのかの問題が出てくるのでは？戦時共産主義の下で労働組合を軍隊化的に組織しようとして批判されたことのとらえ返しも必要。

「いわゆる「人格の絶対的価値」という見地からすれば、革命は、戦争と同じく「有罪」を宣告されてしかるべきである(もっとも人類の歴史全体もそうであるが)。しかし、個人的人格という概念そのものが革命の結果としてしか形成されなかったのであり、しかもこの過程も完結したと言うにはほど遠い。人格という概念が現実のものとなり、「大衆」という半ば軽蔑的な概念が「人格」という哲学的に特権を有する概念のアンチテーゼであることをやめるためには、大衆自身が、革命、より正確に言えば一連の革命というクレーンによって新しい歴史段階に引き上げられる必要があるのだ。この道が規範哲学の見地から見てよいものか悪いものか、私にはわからない。それに正直なところ、そんなことには興味がない。その代わりに、この道がこれまでのところ人類が知っている唯一の道であるということなら、私は十分に心得ている。」338P・・・トロツキーの政治嫌い

「私にとって問題なのは、哲学的に正当化することではなく、政治的に説明することである。」338P・・・トロツキーの革命=政治と現実主義 ロシア革命の内実そのものの総括

「われわれは、主観主義に陥るべきではない。また歴史が自らの事業を複雑で錯綜した形で進めても、すねたり腹を立てたりすべきではない。何が起きているかを理解することは、すでに勝利を半ば確保することを意味する。」420P・・・敗北的局面でどうするのかということでは客観主義に陥っているのでは？

(合同反対派形成の中でのジノヴィエフとカーメネフへのトロツキーの提言)「われわれは遠方に照準を定めなければならない。真剣で長期にわたる闘争の準備をしなければならない。」427-8P・・・？敗北主義、スターリンの肅正を予期できなかった

(ヨッフエとの永続革命論に関してのレーニンとの対話の中でのレーニンの言葉)「そうだ、トロツキーは正しかった。」 450P

(左翼反対派への弾圧の中で自死したヨッフエのトロツキーへの遺書)「しかし、レーニンの不屈さ、非妥協性、つまりいずれは多数派となり、この道の正しさがあらゆる人から認められることを予見して、たとえ一人でも、正しいと信じる道に踏みとどまる彼の覚悟が、あなたに不足していると私はいつも思っていました。」「しかし、あなたによって過大評価されている合意や妥協のために、あなたは自分の正しい見解をしばしば放棄しました。それは誤りです。繰り返して言います。あなたは政治的には常に正しかった。そして、今、これまでのどんなときよりも正しいのです。」 454P(下線は原文濁点)

「もちろん、十月革命によって提起されたこの課題は、まだ解決されていない。しかし、この課題は、その本質上、数十年かかると見込まれている。しかも、十月革命は人類全体の最も新しい歴史の出発点とみなされるべきである。」 537P・・・永続革命論を突き出したトロツキーの思想、けれどトロツキーも書いているように、誰が担うのかによって、全く違って来る、スターリンが権力を握ることによって全く違った道に踏み込んでしまったのです。まさにヨッフエの批判で、トロツキーは自分が敗北することの意味を押さえ損なっていたことの総括の問題がそこにあるのです。

ローザとプルードンの引用 540-2P

SNS の投稿から

2019.8.23 憲法 9 条改憲の意味

憲法 9 条は戦争と植民地支配の謝罪と反省の象徴になっているのだと思うのです。

それを改正しようというのは、謝罪と反省をリセットするということになるのだと、第三者的にとらえられることになるのでは？

憲法改正は、自民党結党以来の党是だという話があります。それが本当なら、自民党は、最初から戦争と「植民地支配」の反省をしていなかった、ということになります。それとも、「謝罪と反省は形だけでいいんだ」ということになるのかな？ そもそも「日本」は総体的に謝罪も反省もなしに戦後を出発してしまったのかもしれないのですがー

そういえば、最近観た「新聞記者」という映画の中で、「民主主義は形だけでいいんだ」という台詞があったのですよねー

2019.8.30 ナショナリズムに対峙、超えるために 1

韓国を批判しているひとたちは、そもそも植民地支配ということがどういうことが分からない、基本的な政治の認識を欠いているのです。だから「韓国は併合時代に恩恵を受けた」とか言えるのです。まさに反日感情に火に油を注いできた、まだしていることをきちんと反省する必要があります。

なぜ、日本はサンフランシスコ条約を結んで、世界一の強国のアメリカの占領支配から脱したのか？ そんなことも分からないから、与党の議員からアメリカの州にしてもらったらという発言が出てきたのです。

ジャーナリズムの使命は、自分の政府がおかしなことをしているときにそれを批判して止めることにあると思います。それなのに、他国の批判ばかりとりあげて、批判の矛先をかわしています。朽ちているとしか言いようがない…

最近のテレビに出てくるジャーナリストは差別してきた側のナショナリズムと差別されてきた側のナショナリズムの区別がつかないようです。してきた側のナショナリズムは差別主義です。

わたしはナショナリズム(民族主義)にはどちらにしても批判的ですが、差別されてきた側のナショナリズムは全否定はできないのですが、差別してきた側のナショナリズムはファシズムへの道です。

2019.9.14 批判は自己批判から

わたしの座右の銘は、「批判は自己批判から」です。座右の銘というよりは、こうありたいという願望のようなことですが。今、日韓関係をみていると、こういう姿勢こそが重要なのだと思います。

最近ニュースと報道番組のはしごをしています。一番のお勧めは、B S T B S 1930 で、昨日日韓問題の特集をしていたのですが、元漫才師の「ぱっくん」が、「わたしは日本に 26 年いるけど、アメリカ国籍だから、アメリカのやってきたひどいことがあるということをお話してから、この問題を話したい。」という話をしていました。今、外交問題を論じるときは、こういう姿勢が大切なのだと思います。そういう姿勢のない政治家がいかに多いことか—

まず第一次的に責任があるのは、自分の国の政治です。

社会変革への途 (2)

序論—いかにして現体制は維持されているのか

前号でもくじを作り、提示したのですが、早速踏み外します。

いかに変えていくのかを語るためには、現状がどうなっているのかを押さえる必要があるからです。これについては、いろいろ書いていることなので、ここでは、現政権の情報隠蔽と操作、そして体制そのものが作り出している「情報隠蔽と操作」について、アウトラインだけ書いておこうと思っています。これは試稿です。この序論にあたることは、い

くつかのパターンを出していくことになります。

(1) 現政権に特有な端的な情報操作・隠蔽・歪曲

これについては、わたしが「通信」の中で繰り返し、アベ政治批判として書いてきました。

<https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3/e-1>

特定秘密保護法制定、歴代首相が憲法違反としていた集団的自衛権を盛り込んだ安全保障関連法案の改定、共謀罪の制定、またつきつぎに出てくる疑惑や不祥事に、首相自身の「わたしが最高責任者だ」という発言、官邸とりまきの「総理のご意向」という、まるで水戸黄門の「印籠」をふりかざすようなことをし、それに呼応する付度を引き出す、しかも、法案はことごとく強行採決で通し、なおかつ「強行採決など一度していない」と詭弁を弄し、閣僚の数々の辞任における任命責任や、疑惑に対しては、ちゃんと質問に答えないうで、自分の言いたいことをいい、答弁席から質問者にヤジをとばすという、国会とはコミュニケーション障害に支配されている場以外のなものでもないということさらけ出し、文書改ざん、議事論の改ざん、というちゃんと情報保障があった上での議論なのに、まさに情報障害にさらされる場と国会がなっていたのです。そこまでして押し通してきました。そして、支持率が下がると、「国民の批判を真摯に受け止め、・・・」と反省するふりをする。また、選挙の頃になると、何か保守票を掘り起こすことをやり、争点ずらしをする。国会を開くと支持率が下がるからと、国会さえちゃんと開かない、そして野党、野党議員個人への陰謀術策、数々の幸運という中で、保守そのものの脆弱性と野党勢力の解体的状況の中で、政権を維持してきたのです。

わたしはその政治のひどさは、戦後 29 年として出された安倍首相談話の中に端的に示されていると思います。どう見ても首相談話になっていない、まるで保守の政治評論家のような無責任極まる文です。そして、第二次安倍政権になって、極右としてさっそく靖国参拝をし、韓国、中国と首脳会談さえ開けず、いかに悪化した外交関係を修復できるかとして、とにかく、侵略と植民地支配という文字さえ入れれば良いとして、首相周辺と一緒に書いた、まるで政治家の能力はいかにうそをつけるか、そしてそのうそをごまかせるか、ということがにじみ出た作文なのです。そのことは、今回の日韓摩擦の中で、自民党の政治家がテレビに出て、またぞろ、「日韓併合で韓国も利益を受けた」と、まるで「植民地支配」ということばを決して使わないと意思一致しているような対応の中に、端的に表れています。安倍談話批判については、直後にわたしがまとめた文がありますので、何度も貼り付けているのですが、それを見てください。

https://docs.wixstatic.com/ugd/6a934e_456e935796f649c69042dd0690c1cfae.pdf

(2) 資本主義社会の定番の情報操作・歪曲

いくつかのパターンがあります。①国家というところから演繹していく問題、②危機を煽っていく問題、③差別的意識をあおり、また民衆の差別意識に乗ったところから起こしている問題、④他の選択肢を潰していく問題、⑤古い観念を利用してからめとっていく問題、⑥マスコミへの圧力・懐柔と利用、これに沿って展開してみます。

① 国家というところから演繹していく問題

まず、国会という場によって政治の方向性を決めるということがあります。国会という

ことで、すでに国家という論理にとらわれているのです。それで、「国益」という概念にとらわれます。外国とのまさつが生じたとき、相手の国の立場にたって考えてみる、という思考を困難にさせるのです。まさに国民国家というところで、国民統合していくことが、保守政治に有利に働くということです。そして、政権をとっている党は選挙に合わせて人気取りをし、そこで世論操作をしていきます。

② 危機を煽っていく問題

次に、危機をあおるという常套手段です。これは「〇〇が攻めてくる」ということで、軍事的対応が必要というところで、軍の拡大というところで①の国家意識も相俟って、保守が支持を得ていくという構図です。これは「東西冷戦構造」の中で、「共産主義の脅威」ということを言って、攻めてくるということをする脅威をあおることをしてきました。そもそも「共産主義の国」など存在しません。「共産主義」と「国家」は併存し得ないのです。で、共産主義の第一段階としての社会主義」としても、その前の「プロレタリアートの独裁」の段階で躓きました。それはプロレタリア独裁や被抑圧者の独裁というところから「社会主義」の建設を目指す過程で、干渉戦争を受け、防衛という中で「一国社会主義建設」という誤った道に突き進み、「社会主義国家」と自称していた国が崩壊していきました。結局国家資本主義から抜け出せなかった国なのです。さらに、「一国社会主義建設」の中で、「社会帝国主義」と批判されるような覇権国家になっていって、他の国に侵攻するようなことをしています。

ですが、戦後植民地支配から独立運動が起きて以降、他の国に侵攻するなどということをしたのは、実はアメリカが一番やっていることです。そもそも自分の国が日米安保条約の地位協定で、従属国扱いをされている、一番攻めてくる可能性が高いのは、従属国をやめたときのアメリカなのです。

その「侵略の脅威を煽る」ことには、もうひとつ批判をしておく必要があります。それは侵略ということとは、一般に何らかの利益を求めて行うのです。戦後植民地支配からの独立運動が起きる中で、「植民地支配は割に合わない」とされたのです。それに、そもそも日本を植民地支配しても、資源など何もない国を植民地にしても経済的意味がないのです。むしろグローバルゼーションの中で、経済的に取り込み、その中で経済的収奪していく構造を作ってきたのです。軍事的行動を起こすとしたら、主にナショナリズムを煽るという中で、自らの支持を広げて国民統合を果たしていくという政治的意味だけです。

さて、もうひとつの常套的脅威論、「共産主義の脅威」の話です。「共産主義の流れのグループが政権をとると過去に起きた、粛正や虐殺のようなことが起きる」ということを主張します。確かに、ここでの、きちんとした総括とその上にのっつた情報宣伝が今必要になっていると思います。これについては、本論で展開していきます

③ 差別的意識をあおり、また民衆の差別意識に乗ったところから起こしている問題

今、これは民主主義という建前の中の「人権思想」のそれなりの広まりの中で、表の政治では不規則発言という形で繰り返し出てきても、批判され撤回していくことを繰り返していっています。それは議会主義の表面からしずめているだけで、一部ヘイト集団のヘイトスピーチやインターネットの「ネトウヨ」という形で、表にも出てきています。かつてから、右翼や暴力団は弾圧の裏舞台として動いていました。弾圧が一段落して、民主主義

の虚構を維持し幻想をふりまくために、暴力団新法とかで、弾圧される対象になっていったのですが、まだ、つながりが消えているわけではなく、社会運動が大きくなるとまたぞろ出てきます。そもそも、それらのひとは、自民党の多数の人が所属している日本会議というカルト的集団を媒介にしてつながっていて、首相もふくんで一緒に写真をとったりして、それがインターネットでアップされているのです。いつでも、行き詰まると、必ず表に出てきます。差別主義的集団として、そこで、ファシズム的ポピュリズムを煽っていくのです。

④ 他の選択肢を潰していく問題

これは、今の野党批判の構図と似ています。どっちがやっても変わらないとか、一時的に野党が政権を握ったときの失敗をとりあげ批判して、他に選択肢がないからとか、いうところで現状が維持される構図です。

そこにお金による操作も絡んできます。原発もそのようなところで、安全神話という虚構を作り出し、増やし続けていました。太陽光発電も送電線網を使わせないというところで、日本の技術はかなり進んでいたのに潰してしまっていたのです。

⑤ 古い観念を利用してからめとっていく問題

これは③と重なっているのですが、日常的な習慣や観念のようなところで、体制を維持していく構図です。家意識とか、干支とか、占い、オリムピックとかスポーツで、郷土意識的な「くに」を国意識に変えるとか、そんなところで体制が維持されていきます。

⑥ マスコミへの圧力・懐柔と利用

そもそもマスコミなども資本ですから、財界の仲間です。ですが、何を売り物にするかということで、御用機関的でなく政府批判的なところで紙面や放送を構成したりする場合があります。これは日本特有の仕組みですが、記者クラブ制度とかで、圧力がかかっています。更に、これは(1)で書き落としたことですが、安倍首相は定期的にマスコミ首脳とお食事会までして融和・懐柔を進め、更にニュースキャスターやコメンテーターの人事への介入、番組の内容まで、圧力をかけています。だんだん否定的状況になってきているのですが、今、それでも、なんとか圧力をかわし、くぐりながら、ジャーナリストの「良心」に基づいて番組作りをしている部分もいるというような状況になってきています。

(3) 現社会に生きて営むことから、自成的にとらわれていく観念

これは、日常生活を営む中で、常態的(ルーティン化された)行動の中で、身につけていく、実体主義的に存在しないことを実体的に存在すると思いついてしまう幻想です(物象化という概念や構築主義ということにとらえ返しが進んでいます)。

さて、いくつもの観念をあげることができるのですが、この社会を成り立たせている基本的なことをいくつかあげてみます。

① 国家というとりわれ

坂本義和さん(もう亡くなりました)という政治学の教員が、「毎年大学の最初の授業で、「国家とはなにか？」ということで学生に議論をさせると、毎年、「国家という実体はない」という結論に至った」という話をしていました。

国会ということがあり、定期的に選挙をする、国益ということを議論するから国家という観念にとらわれていきます。国家とは、官僚的・軍事的統治機構というレーニン主義の

規定がありました。これを地方自治体のことと対比させて考えてみます。自治権の強いところでは一応さておきます。そこには準国家的機能があり、ときには中央国家からの独立ということがおきてくるからです。地方自治体には行政機能があり、警察機構はもっていますが、軍隊はありません。そして一般に、地方自治体同士で戦争をするということは考えられません。日本と中国の関係が埼玉県と千葉県の関係だったら、そもそも大きな衝突は考えられません。なぜ、国境とかあるのだらうと考えます。そもそも、国とは何かということを考える必要があるのです。近代国家は民族的国民国家として形成されています。ネグリ／ハートが『<帝国>』の中でグローバルゼーションという概念で、労働者も資本も国境を越えて移動するのだから、民族国家ということは消滅していくだろうということを書いていましたが、確かにECのようなことを作ったのはその現れですが、そもそも資本主義社会では国家の消滅ということはありません。それは、グローバルゼーション時代の資本においても、継続的本源的蓄積（ローザ・ルクセンブルクの概念です）を資本は求め、それなしには資本主義自体が成立しないからです。そこでキーワードは差別ということなのです。ですから、差別は資本主義社会にくみこまれてあるのです。そこで、国家の第一の目的は秩序の維持、その中身は生産手段の私有財産制度の維持にあるのですが、それをナショナリズムによって、すなわち、民族主義と国家主義によって維持しようとするのです。ナショナリズムという語があいまいになっているのですが、それは民族主義と国家主義が表裏一体になっているというしくみから押さえ直す必要があるのです。

これまでの社会変革志向のひとたちの運動はマルクス・レーニン主義という形で教条的に現れていましたが、レーニンはマルクス／エンゲルスの『ドイツイデオロギー』を手にしていなかったという話があります。そこで、マルクスの「国家とは共同幻想である」という規定からする、運動のとらえ返しが今、必要になっているのだと思います。これも本論で展開していきます。

そもそも軍隊とかなぜ作るのか、戦争がなくなるのかということを考えていくと、この国家へのとらわれや国家主義があるわけです。いかに、国家という共同幻想から自立（これは、わたしが反差別論の立場から批判しているひとですが、吉本隆明さんの『共同幻想論』の中での「自立」概念です）できるのか、これが大きな課題です。

② 貨幣というとらわれ

テレビ朝日のニュースキャスターをやっていた古館さんが、脳科学者の養老孟司さんにインタビューしていたときに、養老さんが「貨幣というのは幻想だ」という話をしていました。実は、このような話をかつてしたひとがいました。カール・マルクスです。テレビのニュース番組の中で、マルクスの名前やマルクスの思想の内容を出すと、大騒ぎになると思うのですが、養老さんが自分が独自に考え出したこととして（実際にそうだったのかもしれません）、そのまま自民党の圧力もかからなかったようです。

貨幣は日常的に使っています。そのルーティン化(常態化)された活動が、お金がないと生きていけないという思いを作り出します。実は、必要なのは生活物資でお金ではないのですが、この社会の仕組みとして、市場経済ということで、商品とされる生活物資を金で買うというシステムを作りました。そこで、金がないと生きられないという思いにとらわれます。これは市場経済にどっぷりつかっているところでの話です。この貨幣へのとらわれ

は、この社会は金の世の中だというようなとらわれに陥らせます。「資本の論理」ということがあって、悪無限的な利潤の追求の中で、資本はそして資本主義的なことにとらわれている個人は、金のために（金を増やすために）生きているという本末転倒に陥るところにもつながっています。この話は④の「労働能力の違い」という概念にもつながっていきます。

③ 特許—知的財産権というとらわれ

中国が改革開放路線というところで、資本主義的性格を強めて、貿易に精をだしていくときに、「知的財産権の侵害」という批判を資本主義そのものの国から受けました。それで、一応「社会主義」を掲げていましたから、「知的財産権」などというのは資本主義の論理だから、そんなものは、自分たちには関係ない」とはねつければ良かったのですが、改革開放路線で、資本主義化しているときで経済制裁を受けないためにも、しかも、資本の輸出を受け入れ、生産力を高めることが一国社会主義の進展に向かうという路線をとっていたので、そこでルールを受け入れることになります。

「そもそも知的財産権とは何か」というまえに、そもそも資源とは何かのはなしからしなければなりません。

そもそも資源—「財産」の多くは自然の恵みというところから出ています。大昔は採取や狩猟経済ですから、ほとんど自然の恵みでした。農業となると「わたしが作ったものはわたしのものだ」という近代の論理が少しは出てきます。ですが、食物を育てるのは、太陽、水、土の栄養分、そちらの要素の方が大きいのです。しかも、大規模な農業的インフラは公共事業として行われるので、「わたしが作った」という論理はなりたたなくなります。さらに、災害などあるといっぺんにご破算になります。いかに、自然という要素が大きいかが分かります。農業が土地の所有権を生み出したという話もありますが、厳密に言うと単に使用権なのです。しかも、個人使用権である必要はないのです。ただ、産業社会になると、自然の征服とか言いだし、科学信仰に陥っていきます。それが何をもたらしてきたのか、環境破壊など、そしてバイオテクノロジーの「発達」の中でひとという種の絶滅のおそれさえ語られ出しました。最近では原発事故、そして核兵器の開発は、ひとが爆弾の上で生活しているような恐怖を抱きながら生活せざるを得ない状況を生み出しています。それらのことは、科学批判の中で端的に示されています。「ひとは自然に適う生き方しかできない」（これは原子力研究者から転じて、反原発の運動をやっていた市民科学者高木仁三郎さんのことばです）のです。そもそも、自然や自然の恵みはひとの、そして生きとし生けるものの共通の財産なのです。それを「わたしのものだ」としていく私有財産制自体が一切の害悪の根源なのです。「太陽はわたしのものだ」「降り注ぐ雨水の水はわたしのものだ」「風力発電の風はわたしのものだ」とか言うことはありません。その延長線上に「地下に埋もっている資源をわたしのものだ」とか、「土地はわたしのものだ」ということのおかしさもあるのです。

話を知的財産権、とりわけ特許ということの、今のこの社会を成り立たせている論理に戻して、そのおかしさを指摘しておきます。ひとの知的財産のひとつの現れは言葉をもったことから始まります。流行語ということがあり、そこで誰がその言葉を使い始めたということが分かる場合もありますが、膨大な過去の蓄積の中で、「言葉は誰かのものだ」とい

うことはありません。そもそも言葉なしには知的所有権ありません。

もうひとつ、特許ということを考えればいいのですが、過去の膨大な地の蓄積の中で、新しい特許がうまれます。で、どこかで特許を切断します。それを共有財産としてしまうのです。それならば、はじめから過去の膨大な蓄積の上になりたっていることとして、すべてのことを人類の共有財産にしまえばいいのです。でも、それをするとこの社会は成り立たなくなるのです。だからこそ、資本主義を成り立たせている根本原理の「知的所有権」のルールを守れと、中国を攻めていたのです。

④ (労働) 能力という概念

さて、この社会の矛盾の根本的なところは、労働の問題です。わたしは障害問題を考えられています。今、「障害者運動」を担っているひとたちの中で、「障害の社会モデル」という考えが広まっています。そもそも「障害を障害者がもっている」という医学モデルに対して、「障害とは、社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」というのが、「社会モデル」の考えで、そのはなしは簡略化されて、「障害者が障害をもっているのではなくて、社会が障害をもっているのだ」という批判にまで進んでいます。実は、その論理は、③ともつながっていて、「能力を個人がもつものと考えない」という・竹内章郎『いのちの平等論—現代の優生思想に抗して』 岩波書店 2005 の主張とリンクしていきます。ともかく、能力を個人がもっているとしたことから、あらゆる取り違えが起きているのです。このあたりは、哲学的なところからのとらえ返しが必要で、わたしが出した本・三村洋明『反障害原論—障害問題のパラダイム転換のために—』世界書院 2010 の中で展開しています。本論でもまた展開してみます。

これは②の話ともリンクしていくのですが、貨幣ということで表される賃金が違うから、能力が違うという、ひっくりかえった能力主義にも陥ります。労働力の価値ということは、マルクスは『資本論』の中でその秘密をあばいたのですが、マルクスの思想をうけついではずが、その思想を理解していなかったスターリンが、「能力が違うから賃金が違うのは当たり前だ」とか言ったという話があります。一応「社会主義」を唱えつつ、賃金格差をなくしていくという「社会主義」の根本理念も理解していなかったという話、まさに、日常的なルーティン化された活動とその中でとらわれていく意識のからめとられさを表しています。

もう少しきちんと煮詰めた論理展開をしなくてはならないのですが、序論でアウトラインだけ示してみました。

(編集後記)

◆月刊発刊、しかも何回か 18 日発刊続けています。どこかで、まとまった論攷を進めるときには崩すかもしれません。ある程度臨機応変にやります。

◆今回の巻頭言、まともやアベ政治批判です。アベ政治批判の核心は国家主義批判だと思っています。そのことがナショナリズム概念とつながりました。この話は、前回お休みにしていた、「社会変革への途」の論攷につながっています。これは情報隠蔽・操作の中での

「とらわれ」ともっと根深い「とらわれ」の話なのです。実は物象化とか構築主義のはなしにもリンクしていくのですが、これを説明するのは大変で、ここではほとんど割愛しています。

◆「読書メモ」は、トロツキー学習第二弾、中国のトロツキー派の本とドイツ革命の本をすでに読んでいるのですが、殺されていくひとたちの情景が浮かび、それがわたし自身の体験にもつながり、心乱れる日々になりました。

◆「SNSへの投稿から」は短い文で、端的な文を書く訓練になると思います。わたしにしては読みやすくなっています。

反障害—反差別研究会

■会の方針

「障害とは何か」というところでの議論の混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げています。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この会でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成のためにあります。会としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされています。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会をかえようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としなが議論していきたいと考えていきます。

■連絡・アクセス先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害—反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>